
新一と蘭の試練

坂井奈緒子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新一と蘭の試練

【Nコード】

N5426G

【作者名】

坂井奈緒子

【あらすじ】

やっと付き合い始めた新一と蘭。しかしある日ひょんなことから二人は喧嘩してしまう……そこへ新一への復讐を狙う奴らが現れ……！！？

第1話（前書き）

駄文ですが是非読んでいただければ嬉しいです！文章能力が低いので伝わらないこともあるかもしれませんがどうぞよろしく願います。

第1話

ある冬の日の夜

工藤邸からは叫び声が聞こえていた

「忘れるなんて最低っ！

新一信じられない！！」

蘭が涙声で訴えた

「本当に悪かったって言うてるだろ！！」

新一も負けじと叫んだ

「新一。

反省する気あるの？

もう知らない！！」

「おい！蘭！

待てよ……！！」

新一の声に耳も貸さず蘭は寒い夜へ飛び出した

事の発端は半日前……

同じ日の朝から始まる……

- - - - -

「えっ……？」

事件？」

「そうなんだ…

悪いな、蘭…」

今日の約束違う日でもいいか…？」

珍しく朝早くから新一から電話がかかってきて浮かれていた蘭は一
気に落ち込んだ

「そっか…

しょうがないよね…」

新一のせいじゃないもんね…」

「本当に悪い…

夜までには帰るつもりだから俺の家で待っていてくれよ！
な？」

「うん…

わかったよ！

新一の家で待ってるね。」

「じゃあもうすぐ警部が迎えにくるから…

電話切るな…」

「うん！

事件頑張ってね！…」

電話を切った蘭は少し嬉しかった

今日は新一と蘭が付き合い初めた記念日なのだ

何かおいしい物を作って新一を待っていていようと思っていた

(よ・し！)

今から買い出しに行こう！！)

夜8時

蘭が料理を作って待っていた所に新一が帰ってきた

「お帰り〜！

新一。

今日はちゃんと約束通り帰ってきたね！」

「ただいま。

待っていてくれてサンキューな！

今日は本当に悪かった…

…ん？

すげーいい匂いすんじゃない！」

「夜ご飯一緒に食べればいいなと思って今日のために作ったの！
食べて 食べて」

「お〜！

うまそうじゃない！」

ん！！！！

んまい!!
やっぱ蘭は凄いな」

「そんなことないよ...」
今日は特別だからちよつと頑張っちゃった!」

「へ?」
今日?
何の日だっけ?」

「.....」
ちよつと新一覚えてなかったの?
今日はあたしたちが付き合い始めた記念日なのに...」

慌てて思い出した新一だったが時既に遅し。

30分後には大きな家に沢山の冷めてしまった料理と呆然と立っ
ていた

第1話（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。よろしければ評価・感想よろしくお願いします。

第2話（前書き）

時間が少し戻ります

第2話

新一と蘭が喧嘩する1週間前…

夜の道にある1台の車が走っていた

そこには二人の男が乗っていた

「おい！」

あの工藤新一に復讐するいい方法は見つかったか？」

「いえ…まだです…」

ですが工藤新一の弱点なら見つけました！

毛利蘭という女です。」

「そうか…」

女か…

人間女のことになると必死になるからなあ…

その女については調べてあるのか？」

「はい。」

現在帝丹高校3年

工藤新一とは幼なじみで

2年生の時から付き合い始めたとか…

両親は別居中で毛利蘭は父親と一緒に住んでいます。

その父親はく眠りの小五郎>として有名な探偵で母親は有名な弁護士です。」

「ほお〜」

凄いところの娘さんじゃないか…

でもこういう女は脅せばイチコロだな…」

「…ですがこの女、父親が探偵でよく事件に巻き込まれるらしくてかなり度胸があるみたいですよ…」

しかも高校の空手の都大会での優勝経験もあります…」

「まあそのことについては後々決めるとしよう。

それにしてもよくそんなにたくさん調べてくれたな。

助かったぞ！」

「いえ…こういうのが好きなのです。

情報収集なら任せてくださいよ」

「でもターゲットは毛利蘭決定だ。

しかしいい鴨を見つけたな…」

復讐するにはいいターゲットだ。

せいぜい今のうちに楽しんでおくんだな…」

待ってるよ…工藤…新一」

車は暗闇の中へ消えていった…

もちろんこんな会話があったことなど二人は夢にも知らない…

第3話

（はあっ、はあっ、

夢中で走ってきたら上着着てくるの忘れちゃった…

どうしよう……

今新一の家に行ったら気まずいしな…

でも寒いし…）

とぼとぼ歩いていた蘭の後ろをつける二人がいた

「佐藤さん、

あれが例の毛利蘭です」

「あの娘か…

工藤新一とは一緒じゃないのか……

まあその方がいい…

本当は下見のつもりだったが今がよさそうだ…

周りに人がいなくなったらやるぞ」

そんな二人が後ろにいるとも知らずに蘭は人気のない米花公園へと入っていった…

（本当にどうしよう…
新一に謝らなきゃ…
あたしいつも素直になれない…
こんなんじゃ新一に嫌われちゃうよ。
やっぱり謝りに戻ろう）

蘭が工藤邸に戻ろうとした時一人の男に話し掛けられた

「よお、あんた一人か？」

人気がない所で急に話し掛けられた蘭はびっくりした

「な、なんですか？」

「ちょっとついてきてほしいんだが…」

不信任を感じた蘭は関わらない方がいいと思った

「あたし行く所があるので…」
蘭はきつい口調で言った

「そういうわけにはいかないな…」

「何ですか？
失礼します…
うっ……」

公園を立ち去ろうとした蘭の後ろからもう一人が薬をしみこませたハンカチを蘭の口に当てた

抵抗した蘭だがすぐに意識は遠退いていった

(助けて…新…一…)

ドサッ

「案外楽にいきましたね」

「いや油断は禁物だ
早くこいつを運ぶぞ」

二人は気を失った蘭を車に運び走り去って行った……

第4話（前書き）

だらだらと書いてしまいました。すみません

第4話

その頃まだ何も知らない新一は……………
走っていた

（蘭！、蘭何処に行ったんだ…
園子の家、探偵事務所、よく行く商店街…
全部探したけどいね…）

最後に新一はデートの待ち合わせ場所としてよく使う米花公園へと
向かった

（ここが最後だ！
頼む！蘭いてくれ！！）

しかし、新一の思いも虚しく公園は人っ子一人いない静かな場所だ
った…

（いない…
あいつどっかで泣いてるんだろうな…

ははは…
バカじゃねーか俺。
せつかく戻ってきたっていうのにあいつを泣かしてばかりで…
あいつを守るのは俺だけだっと思ってたのに…
ダメじゃねーか…

あいつの涙は何回も見た

原因は全部俺。

あいつのこと全部わかってるみたいなこと言ってたけど結局はあいつのことまだ何もわかつちやいねーのかもしれないな…

これからはもつと蘭のことを大切に考えないといけねーな…

もう事件だからってデートを断るのはやめよう

あいつには笑顔が1番似合うんだ。

その笑顔を奪っているのは俺だ…

あいつの笑顔を取り戻さなきゃいけない…

きつとそれは俺にしかできないんだ

俺は笑顔のあいつの隣にいたい

そのためにも

早く俺の気持ちを蘭に伝えたい…)

喧嘩をきつかけに反省した新一。

新一は再び蘭を捜すために静かに米花公園を後にした…

大切な人に自分の思いを伝えるために…

まさか蘭がその場所で危険なめにあつたとは知らずに……

第5話

翌日・朝・工藤邸

はあ〜

無意識のうちにため息が出た

あれから米花町のあらゆる場所を探したが蘭を見つけることはでき
なかった

まさか…

危険なめにあってるんじゃない…

新一が蘭の身を心配し始めた時一本の電話が
新一の携帯にかかってきた

〜

ディスプレイを見ると蘭からだった

新一はすぐに電話に出た

「蘭!

今何処にいるんだ?

昨日は俺が悪かった…」

しかし聞こえてきたのは蘭の声ではなかった

「工藤新一か？」

「!？」

お前誰だ！

蘭はどうした」

「毛利蘭ならすやすやと眠っているよ…
なかなか可愛いお嬢さんじゃないか…」

「てめえ -

蘭に何かしたらただじゃおかねえ」

「そうそう熱くなるなって…」

「だいたい君はそんなこと言える立場じゃないだろう…?」

「どおいう意味だ…」

「毛利蘭は我々の所にいる。

つまりこの娘の命は我々が握っているんだ…」

「何を企んでるんだ…?」

「この娘の命が惜しかったら今日の5時杯戸町3丁目の空き倉庫へ
来い。

もちろん一人でだ。

警察や友達などに相談するのもダメだ。

お前の行動が少しでも怪しかったら毛利蘭に二度と会えないと思え。

いいか…

わかってるだろうが

この娘は我々があずかっているのだぞ」

「わかった…

必ず一人で行く…

だから蘭は解放してくれないか…？」

新一は心から頼んだ

「それはできない…

あくまで人質は毛利蘭だからな。

忘れるなよ…」

ブツッ…

電話は一方的に切れてしまった

現在時効午前10時

杯戸町3丁目に行くには4:00に家を出れば十分だった

しかし新一は蘭のことが心配でたまらなかった

（くっそ……！
俺のせいだ……）

家でじっとしてゐるわけにもいかず新一は家を飛び出した

「あら……？」

「工藤君？」

家の前で不意に名前を呼ばれた新一は声のする方へ振り返った

第6話

振り返るとそこにいたのは赤みがかかった茶髪を風に揺らしている小学生の少女だった

「は、灰原!？」

お前こんな所で何やってんだ？」

いつものように冷静ではない新一は思わず変なことをしゃべってしまった

「何ってすぐ隣が私の家なんですけど…」

灰原は明らかに不信がっていた

「工藤君？」

あなた何か変よ…?」

「そ、そうか？」

俺はいつも通りだぜ?」

灰原に指摘され新一は焦った

「何かあったの？」

そういえば今日は蘭さんと一緒ではないのね」

「ら、蘭か？」

蘭は……その…空手の合宿に……」

「工藤君。」

あなた何か隠し事してるでしょ？
私に秘密なんか作っても無駄よ。」

「何もしてねーって言ってんだろ！！」

新一は灰原に見事に当てられムキになって否定した

「そんなにムキになったら何かあるとしか思えないわ…
もしかして蘭さんが絡んでるとか？」

「灰原。」

お前には関係ないことだ。

悪いが今日のことは忘れてくれ……」

新一は冷静さを取り戻した

「蘭さんに何かあったのなら相談にのるけど…？」

「だから……！」

待てよ…！？」

（灰原はどう見ても小学生にしか見えないよな…
だったら俺の家に入って相談してもあいつらにはぜってーばれね…）

「灰原…」

悪い…話があるんだ……」

ちよつと俺ん家に来てほしいんだけどよ……」

「いいわよ……」

なんとなく危ないかんじするわね…

でも蘭さんのためだったら協力するわ」

二人は工藤邸へと入った

.....

「.....つてなわけで今蘭がヤバイんだ..

例の倉庫には俺一人で行く。

でもこっそり援護してくれないか？

あいつらもまさか小学生が俺が繋がってるとは思ってないだろうしよ」

「なるほどね..

わかったわ。

でも援護つて何をすればいいのかしら？」

「それはお前に任せる。

何が起こるか俺もわかんねえ..

ただもしものことになったら蘭だけでも連れて逃げてくれ。

この事件は元々俺が記念日を忘れたことがいけなかったからな..」

「わかったわ。

でもなるべく二人とも助けるようにするから..」

「サンキューな。

でも絶対見つかるなよ

お前が危なくなるからな..」

「あら？」

「心配してくれるのね..

ありがとう。

でもこの小さい体をいかして見つからないようにするわ。」

「ったく…」

素直じゃねーのは変わらないな…

でも頼んだぜ！

灰原だからこそ頼めることだ。

さすが俺の相棒だぜ！」

灰原哀という心強い味方ができ少しの間新一は安心した……

第7話

- 杯戸町3丁目の倉庫 -

暗い室内に一人の少女が横たわっていた……

「……んっ、ん？」

「お、やっと目が覚めたか……」

「あ、あなた達！」

ちよつとどういうことか説明しなっ……！？」

佐藤に詰め寄ろうとした蘭だが手と足を縄で結ばれていて身動きが
できなかつた

「悪いな。」

でも空手の達人って聞いてたからな。

自由にするわけにはいかないんだ」

「あたしにこんなことして何が目的なの？」

言っとくけどうちに身代金を要求しても今家には誰もいないわよ」

「はっはっは。」

面白いことを言うお嬢さんだ。

さすが毛利小五郎の娘。

肝がすわってるな……

でも残念だ。

我々の目的は金じゃない」

「じゃあ一体…？」

「我々は君のボーイフレンドの工藤新一に用があるんだ。君は工藤新一をおびき寄せるためのおとりさ。何しろあの名探偵さんとはちょっとしたことがあったね…」

「新一…！？

でもおとりがあたしじゃきつとあいつは来てくれない…」

「いいや。

絶対に工藤新一は来る。

さつき君の携帯をちよつと失敬してね、電話をかけたんだ…あの様子じゃあ昨晩はずつと君を探し回っていたようだったよ…」

「うそ…

新一が？」

「しまいには蘭だけは助けられて言われたぜ。」

「……………」

蘭はもう男達の話聞いていなかった

(うそ…

うそよ…

あたしあんなにひどいこと行って何も言わないで家出ちゃったのに

……

そんなことされたらあたし何していいかわからないじゃない)

「そうそうこれだけは教えておくぜ。

俺達は工藤新一に恨みがあるんだ。

これが何を意味するかわかるよな、毛利蘭さん？」

蘭ははっとした

そしてこの男達の言っている意味がわかった

この二人は新一と蘭を殺そうとしている、と……

蘭は必死に祈った

新一！

来ちゃダメ！

新一が死んじゃったらあたしのせいだ！！

第8話（前書き）

ご無沙汰してすみません

第8話

午後3:55

新一は蘭を助けるため・

杯戸町の倉庫へ向かっていた

(蘭！

無事でいてくれ！)

犯人から与えられた情報は少なかったが
例の倉庫はすぐに見つかった

辺りには不気味な雰囲気があった

しかし新一はそんなことには目もくれず
倉庫へ入っていった…

そこには柱に縛りつけられた蘭と
犯人の佐藤と奥田がいた

新一はその顔に見覚えがあった

「お・お前！！

佐藤じゃねーか！

まだ俺に恨みを持つてるのか？」

「しらばっくれるな！」

お前のせいで里沙は……」

「あれは助けられなかったんだ！
もう間に合わなかったんだよ！！」

「言い訳は聞かない……」

お前には死んで償ってもらおう……」

バタンッ

！？

「今この倉庫の入口を奥田に閉めてもらった……
出入り口は裏にあと一つ……」

今からなら逃げられるが
彼女を置いて君は逃げるのかな……？」

そう言い残すと佐藤は出て行ってしまった

新一はすぐに蘭の元へ駆け寄った

「蘭！ 蘭！」

大丈夫だったか？

本当にごめんな？」

「新一！」

あたしこそごめん…

怖かったよ…

でも新一が来てくれてよかった

もうあたしのこと嫌いになって来てくれないかと思った…」

「バーロ

何言ってるんだよ！

俺は蘭を一生守るって決めたんだ！

そう簡単に嫌いになんね…よ」

「ありがとう…

新一

「おしツ！

じゃあここから早く脱出しないとな！

でもただ閉じ込められてるだけだからすぐ出られそうだな…

助かったよ」

「よかった」

……！？

新一！

あれ何？」

新一は蘭の指さす方を見た

倉庫にある小さい窓から見たのは煙と炎だった

第9話

「ま・まずい

やっぱりただでは帰してくれないか…

蘭！

できるだけしゃがんどけよ！」

「うん…

あっ！

新一何処行くの？」

何処かへ行こうとする新一に不安げな声で蘭が聞いた

「大丈夫

蘭を置いてきはしねーから

出られる場所がないか探してくる」

新一は蘭にそう言い残すと倉庫の奥へ入っていった

(くっそー！

やっぱり出口はねーか…)

「おーい！

誰かいますか？」

おい！

ゴホッ　ゴホッ

（やべーな…）

煙で声あまり出ね…（）

その時閉められた倉庫のドアから音がした

ゴン　ゴン

！？

誰かが扉を壊そうとしているようだった

ゴン　ゴン……………バタンッ

壊れたドアの先に立っていたのは……

「は、灰原！

お前…どうやって……………？」

「あなたがコナンの時に使っていた伸縮サスペンダーよ。そんなことより早く脱出しないと…」

彼女は何処に？」

「あ．ああ…」

蘭なら向こうに……………」

新一は最後の力を振り絞って蘭の所へ向かった

しかし蘭を残していた場所は既に煙が充満していた

「蘭！ゴホツ…蘭！」

新一は煙の中で倒れている蘭を見つけた

「蘭！…」

おい…大丈夫か！？」

（まただ…また蘭を…）

蘭を目の前にして呆然としていた新一に灰原も追いついた

「大丈夫よ…」

気を失ってるだけみたいだから…

病院へ行けば大丈夫よ…

さあ早く出ましょ」

新一は蘭を大事に抱いてこの忌ま忌ましい倉庫を後にした

第10話(前書き)

遅れてすみません

第10話

「あれ……？」

「ここは……？」

蘭が目を覚ますと白い天井が広がっていた

「ら・蘭！

大丈夫か！？

よかった〜

ここは杯戸病院。

あの後救急車でここに運ばれたんだ」

「じゃああたしたち助かったの？」

「ああ。

あの二人はもう捕まったよ……」

蘭には大変な思いさせちゃまってごめんな……」

「ううん。

あたし新一が助けに来てくれて凄く嬉しかった」

「当たり前だろ……」

新一は少し頬を赤らめて言った

蘭はくすつと笑って

あの二人は何者だったの？
と聞いた

「ちよつと嫌な話になるんだけどな……」

3年前鈴木里沙さんが俺の家に依頼しに来たんだ……
誰かに狙われてるから調査してくれって……

でも俺はちよつど別の殺人事件で留守にしてて里沙さんには会えな
かった……

里沙さんは仕方なく手紙を書き俺ん家のポストに入れておいた

しかしその帰りに里沙さんは殺されてしまったんだ

俺ん家に来たのを見た犯人が焦って殺したのが真実だったんだが……

あの佐藤は里沙さんの恋人だった

だから俺のことを恨んでいるんだ……

あの時俺が家にいれば里沙さんは殺されずに済んだって……」

「そんな……」

そんなの逆恨みじゃない……」

「ありがとな……」

蘭。

でも人は大切な人を失うと誰かのせいにしなないと生きていけないだ…
悲しい話だがな…」

「そっかあ…」

そんなことがあったんだ…」

二人はしばらく沈黙した

「なんか雰囲気暗くなつたよな…
ごめん…」

じゃあ俺明日もまた来るからよ！

蘭は今日1日ゆっくりここで休んどきな！」

「うん…」

ありがとう…」

「じゃあな

何かあつたらすぐ携帯に連絡しろよ」

そう言つて新一が病室を出ようとした時
蘭が引き止めた

「新一！！」

まだちゃんと仲直りしてなかつたよね？

ホントにあの時はごめん

事件が忙しくて大変だったのに…」

「何言つてんだよ…」

俺が悪いに決まってるんだろ？

もう絶対に忘れないから…

本当に悪かった…」

「じゃあ約束だよ？

もう忘れないって…」

「ああ…」

そう言つて新一は病室を後にした

最終話（前書き）

ありがとうございました

「あ、ありがと…／＼
新一…」

二人はしばらくそのままでした…

「でもさ」

新一。

今日こんなに楽しめたのってあの事件があったからじゃない？
だからあの二人には少し感謝しないとね…」

蘭がゆっくりと言った

「ああ。」

そうかもしれないな…

でも俺は事件がなかったとしても蘭のことは離さないぜ？」

新一の言葉に蘭は真っ赤になった

「…／＼

うん…

あたしも…」

蘭の赤い頬に新一は軽くキスをした

二人の上には綺麗な満天の星空が広がっていた

もちろん新一が警察に今日1日は連絡しないでくれと頼んだことは
秘密だった

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5426g/>

新一と蘭の試練

2010年10月10日07時37分発行